

# 歴史と主体 —— 中村丈夫研究

第5号（終刊号）

まえがき — 終刊の言葉

**特別寄稿** 『中村丈夫精選論集』読後感若干

季報『唯物論研究』編集長 田畑 稔

中村氏の前期社会主義論と民族論からウクライナ問題を  
読み解く — 『中村丈夫精選論集』解題への補遺に代えて — 大石和雄

薄明の頃 — 1960年代中盤学生運動回想 — 前田浩志

**資料** 評論会的変革のための協働委員会（フェニックス事務局）

「解散お知らせ」正文

— 前書き、文献注付き —

『歴史と主体』バックナンバー・総目次

年1回刊 研究誌

**22**年号

歴史と主体研究会

# 歴史と主体——中村丈夫研究

第5号（終刊号）

年1回刊研究誌

22年号

編集／発行 中村丈夫記念・歴史と主体研究会

## 目次

|  |                   |      |     |
|--|-------------------|------|-----|
| まえがき——終刊の言葉……………   | 中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 | 大石和雄 | 2   |
| <b>特別寄稿</b>  |                   |      |     |
| 『中村丈夫精選論集』読後感若干……………   | 季報『唯物論研究』編集長      | 田畑 稔 | 3   |
| 中村氏の前期社会主義論と民族論からウクライナ問題を読み解く<br>——『中村丈夫精選論集』解題への補遺に代えて——…………… |                   | 大石和雄 | 7   |
| 薄明の頃——一九六〇年代中盤学生運動回想——……………                                    |                   | 前田浩志 | 17  |
| <b>資料</b>  |                   |      |     |
| 「解散お知らせ」……………評議会的変革のための協働委員会（フェニックス事務局）……………                   |                   |      | 23  |
| 『歴史と主体』バックナンバー・総目次……………  |                   |      | 28* |

## まえがき — 終刊の言葉

中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄

本誌は、中村丈夫氏が逝去した後に作成された「中村丈夫遺稿集」(USBメモリー)を受け、これらを活用して氏の革命理論を研究すべく二〇一五年に設立された「中村丈夫記念・歴史と主体研究会」の会誌(研究誌)として創刊された。以来、毎年一回の発行を目指し、この間第二号(一六年)、第三号(一七年)、第四号(一八年)と合計四回発行されてきた。しかし、その後、会員の高齢化やコロナ禍ということもあって、最近では活動も停滞し、この三年間は研究会や総会の開催もできないまま、今日に至ってしまった。しかし、幸いなことに、二〇年には会員の努力もあって、「遺稿集」(USBメモリー)に収録された中村氏の論稿のうち、特に重要な論稿二八点を精選して収録した精選論集を『評議会革命への途』と題して、社会評論社から出版することができた。本来ならば、この書物の発行を機に改めて中村氏の理論研究を活性化すべきではあったが、本誌で資料として掲載しているように、研究会を主に支えてきた評議会的変革のための協働委員会(フェニックス事務局)が本年五月に解散することになり、これに伴って本研究会活動も継続が困難となった。そこで、断腸の思いではあるが、ここに本誌終刊号を発行して会の解散とすることを決断した次第である。読者の皆様のご理解をお願いしたい。

さて、本号の内容であるが、本号の最大の特色は、季報『唯物論研究』編集長で、『マルクスとアンシエーション』『マルクスと

哲学』等の著作を発表しておられるマルクス主義哲学者の田畑稔氏からの寄稿をいただいたということである。これまで中村氏の主張についてはマルクス研究の専門家からのコメントはほとんどまったく頂くことはできなかったが、この終刊号においてその思いがかなえられたことは本誌発行責任者としてきわめて感激しているところである。これを機に、中村氏の理論が少しでも広く議論の対象になれば、われわれのこの活動の意義もそれなりにあったといえるであろう。

この他、二名の会員からの論稿を掲載している。さらに、「資料」として、前述の評議会的変革のための協働委員会(フェニックス事務局)の「解散お知らせ」を掲載するとともに、本誌の総目録を掲げている。短い期間であったが、本誌活動の足跡を少しでも残すことができたと思っている。最後に本誌愛読の皆様、これまでのご支援に厚く感謝申し上げます。

二〇二二年二月一日

## 特別寄稿

### 『評議会革命への途——新左翼の理論家・中村丈夫精選論集』読後感若干

田畑 稔 (季報『唯物論研究』編集長)

大石和雄さんには私の『マルクスと哲学』(二〇〇四)が出たとき、批判的論評をお寄せいただいた。実践サイドからいただいた唯一の論評で、感謝している。今回、大石さんが編者代表として二〇二〇年に出されたこの本へのコメントを書くよう依頼があり、勉強させてもらうつもりでお引き受けした。

ただ、この本の三〇六頁に中村丈夫(以下、敬称略)が書いているように「総括はそれをなしとげうる主体の形成と不可分である」。まったくその通りで、自己批判や総括は、何よりもそれに人生をかけ、自分たちがなした行動に責任を背負い、様々な誤謬も確認したうえでなおかつ、その運動の可能性を確信し続けている人間たちこそがなすべきことである。

私のような外部の人間、つまり「新左翼」に属したこともないばかりか、労働運動も組織的政治運動もやっていない哲学・思想畑の無党派の人間に、そういう質の議論など何もできないのは明らかだ。また、私にはこの本への批判や反論といった質の文章も、新左翼運動史研究の作業の一部といった質の文章も書けない。そういう問題意識も動機も経験蓄積もないからである。

「別世界で生きてきた私のような人間にはこういう読後感があつた」。それ以上でも以下でもない。この本に対する外部者の、必ずしも緻密とは言えない感想の一つ、反応の一つとして参考にな

るものが含まれているかもしれないし、まったく参考にならないかもしれない。このことを予めお断りしておきたい。

#### 本書の構成をめぐって

私は一九八〇年代以降、季報『唯物論研究』の編集に携わってきた。その基本姿勢は「新旧左翼から市民主義・リベラルまで」政治的立場を異にする人間が個人の資格で研究会に参加し、共同研究や相互批判や意見交換の場を自分たち自身の手でつくるという点にあった。その背景には、相互批判を協同行動にポジティブに生かす政治文化の不在が、自分を含む戦後の左翼運動の大きな欠陥の一つであるという基本認識があった。おかげで私は編集サイドの人間として「新左翼」系の人たちとも交流を深めることができたが、これはあくまで哲学・思想系の運動の枠内でのことである。

「新左翼」の諸潮流、綱領的立場、対立構図、労働運動や学生反乱や「軍事」を含む、「新左翼」運動の実態や歴史についての認識は、今も皆無に近い。比較的まじめに読んだ本では廣松渉『現代革命論の模索』(一九七二)と渡辺一衛・塩川喜信・大藪龍介編『新左翼運動40年の光と影』(一九九九)の二冊だけである。

だから今回は三冊目になる。

廣松は私の「マルクス再読」作業における主要な批判対象であつて、「胸を借りる」ことができ、今でも本当に有難かつたと思つている。ただこれも哲学やマルクス思想研究という限られた舞台の話である。『現代革命論の模索』は、廣松にとつても例外的に現代革命をテーマにした本であるが、一八五〇年三月の「共産主義者同盟中央委員会の同盟員への回状」にある「永続革命論」をベースにした「新左翼」革命論である。ところが私は共産主義者同盟期のマルクスに画期的なものだけでなく多くの歴史的限界を認識している。むしろ一八六〇年代や晩期のマルクスから読み取れる「可能なるマルクス」、「未完を自覚したマルクス」、「歴史哲学化を拒むマルクス」に、二一世紀に向けて「マルクスを開く」条件の一つを見ようとしているのである。

一九九九年の『新左翼運動40年の光と影』の方は「新左翼」の立場の優位性や未来を語るのではなく、四〇年間の実践、運動の実態、特に「内ゲバ」による破綻と凋落を総括しようとするものである。広い意味で当事者であつた二〇人がこの本で実態を語りつつ、問題の根源に迫ろうとしていて、一読者としてはあるが、「身を切る」自己批判の上に運動再建をめざす人たちに敬意を表したいという強い感懐があつた。

『評議会革命への途』読後感の第一はこの点に関連している。この本は中村丈夫のドキュメント集であり、最も古い論文が一九六六年、最も新しい論文が一九九一年である。二五年間に書かれたものを編者が「精選」し、二〇二〇年に出たものである。意図としては六六年の「評議会革命」の構想段階からはじめ、既成社会

用したうえで、「ただし現下の「一九七四年の」帝国主義世界体制の第二崩壊期では、戦略的には運動戦「機動戦」に転化している」とみなすべきである」としている(二〇一頁、第V部第2章、一九七四年執筆)。だからグラムシ評価の中心も工場占拠と工場評議会の時期に置かれている。

一〇年後の一九八三年執筆の第V部第3章では、同じ文脈を繰り返しつつ「フランスの「五月」以降、特に七〇年代の帝国主義世界体制(＝米ソ共存体制)の崩壊の開始以降、(構造的)には陣地戦の時代が終わつたにもかかわらず、「改良」革命」の二項式から「反乱」革命」のそれへの飛躍の道は見出されて(いない)」「(二二六頁)」と書いている。

一九六八年のパリ以降、果たして「(構造的)には陣地戦の時代が終わつた」と言えるのか、私には疑問であるが、中村の世界認識の根本にあるものとして、一旦それを前提に考えるところでも、中村自身が一九八三年の時点で「反乱」革命」のそれへの飛躍の道は見出されて(いない)」「ことを確認しており、現在、それからさらに四〇年も経過している。

やはり「陣地戦は自己目的でない」という主旨の議論に始終せず、「新左翼」はどう陣地戦を戦うのか、戦つてきたのか、現に戦つているのか、陣地戦をポジティブに位置づけ、「新左翼」的な陣地戦の「質」を実践的に探究する姿勢での自己批判的総括も問われていたのではなからうか。これが第二の読後感である。

一九六六年執筆の第I部第1章では「支配階級の国家的ヘゲモニーに対するねばり強い「陣地戦」の必要」も強調されているし(二八頁)、中村やそれを支持する人々も当然、陣地戦としての色

主義論、評議会共産主義論、少数派労働運動論、日本国家特質論と日本共産主義論など、中村の新左翼革命論を体系的に並べるということであろう。

とは言え、一九七四年執筆の第IV部第2章で中村は「七〇年闘争における新左翼の単に実践的のみならず思想的主体的な敗北」(一九四頁)を語り、第V部第2章でも「新左翼は幾多の自壊を超えて自己内部の日共的体質をも変革」する必要性を語っているが(二九〇頁)、なぜか本書所収論文には「再出発の原点」とされるべき運動実態の歴史的検証を主題にしたものが収められていない。中村は二〇〇七年(八三歳)まで生きたのだから、日本の新左翼運動の達成と限界、「自壊」についても、ポーランド「連帯運動」の歴史的帰趨についても、十分、時間や距離を置いて論じることができたはずであろう。恐らく別の本や別の形態で行つていふと思われ、この本だけを読んだ私のような読者としては大きな不満が残つた。

#### 陣地戦の理解をめぐって

本書を拝読した限り中村丈夫は機動戦の理論家だということだろう。長期波動への関心や軍事研究の蓄積もその点で整合するよう思われる。中村はグラムシの「新君主論」から「一八七〇年以後の時期には、国家の国内のおよび国際的な組織関係はより複雑に、より緻密になり、「永続革命」の一八四八年の定式は、政治学では「市民的ヘゲモニー」の定式に練り上げられ乗り越えられた。運動戦はますます陣地戦に変わった」(Q13 §7)を引

んな活動を行っているだろうし、陣地戦そのものを主題とした論稿が、どこかで書かれているのかもしれないが、少なくとも本書に含まれていないのは残念であつた。たとえばワーカーズ・コープやコミュニティー・ユニオン、エコロジーやジェンダーの運動などはどう位置付けられるのだろうか。

#### 再演的構想力の問題

編者がこのドキュメント集に『評議会革命の途』というタイトルを付していることから判断して、本書の中心論文は一九七八年執筆の第III部第1章「評議会共産主義——その理論的構築のため」の試論」であると思われるが、その冒頭にこう書かれている。

「評議会共産主義——それはブルジョア社会——国家の危機、すなわち同時にプロレタリア革命運動の危機にさいして不死鳥(フェニックス)のように発現する(本来の)共産主義である。」(一一〇頁)「マルクス・レーニン主義者の(本来の)姿」「(本来の)世界プロレタリア革命の理論」(一一四頁)なども書かれている。

中村の「新」左翼は「真の」「本来の」左翼なのであり、その根拠はロシアでのソビエト共産主義、それに連動したヨーロッパ、特にドイツ共産主義者の一部や若きグラムシに見られた労働者評議会共産主義、これらの秘めていた可能性や意味の歴史的評価にある。現実過程では短期で敗北・変質したとはいへ、(本来の)共産主義が現に実践された。これを再演する運動は歴史の諸危機に際し繰り返し不可避的に立ち現れるはずである、と。

中村の中にも「再演的構想力」が強烈に働いていることは明らかである。私はヘーゲルやマルクスのように「パロディ」としての滑稽だけをテーマに演劇論として「再演的構想力」を考えていないし、そのような理解の一面化は避けるべきだと考えている。むしろ歴史的实践の当該諸主体にとって「再演的構想力」の果たす肯定的否定的役割の重大さに注目するものである。端的に言えば「再演的構想力」への注目なしには歴史的实践は理解不能である。

第三の感想はこの点にかかわる。二〇二〇年代の現在、一九一七年から一九二〇年代初頭の露独伊評議会運動をベースにしている、中村のこの一九七八年の「再演的構想力」自身を歴史的に相対化する作業は、はたして不要なのか。確かに二〇世紀の革命史の総括の一視点としては大変勉強になったが、果たして二一世紀の今も「フェニックス」なのかと考えると、中村が「再演的構想力」に縛られすぎているという印象はぬぐえない。この点についても総括の議論があるのかもしれないが。

私のようなポジションで考えている人間には、一八五〇年代初頭のマルクスの「永続革命論」より、むしろ彼の「生活過程」論、とくに「総過程」である「現実的生活過程」や「歴史的生活過程」に注目すべきであると思われる。これは実践面では労働運動を含む多様な社会運動を資本に対する対抗ヘゲモニーの枠組みに接合していく社会主義運動の基本戦略としても不可欠であると思われるし、理論面では、新しい歴史の現実には批判的概念把握のメスを入れるためにもカギになると考える。例えばマルクスの時代の産業革命と同様、いやそれをはるかに超えて、情報技術革命による

生産様式、流通様式、生活様式、コミュニケーション様式、闘争様式、軍事戦闘様式などの激変が進行中であるが、上位概念に一旦視点を移すことよって、上位概念を構成している下位の諸形態（ドミナントな、補完的な、対抗的な、周辺の諸形態）の歴史空間における並存の現在のな姿と改めて向かい合いなおす作業が視界に入ると思われるからである。

## 中村氏の前期社会主義論と民族論からウクライナ問題を読み解く

### 『中村丈夫精選論集』「解題」への補遺に代えて

大石 和雄

はじめに

諸々の事情で本誌発行ができなかったこの二年の間に、「中村丈夫遺稿集」（USBメモリー）に収録された中村氏の二八編の論稿のうち、二八編ほどを選んで『評議会革命への途—新左翼の理論家・中村丈夫精選論集』（社会評論社）として二〇二〇年に発行してきた。筆者はそのなかで「解題」を執筆したが、そこでは「解題」という名の通り、それぞれの論稿の執筆時期や掲載メディアなど、その論稿の執筆背景などを簡単に記すだけに終わり、論稿そのものの内容的考察にまではほとんど踏み込めなかった。そこで、ここでは本書をできるだけ多くの方々に読んで頂くように、「解題」では余り論稿の内容的説明に踏み込めなかった論稿で、かつ筆者の問題関心の高い論稿に関して、「解題」から「解説」へと一歩踏み込む姿勢で筆者のコメントを述べてみたい。

#### 一 「前期社会主義論序説」の意義とウクライナ問題の捉え方

二〇二二年二月のロシアによるウクライナ侵攻は、誰にとっても驚愕的な事態であつたらう。直後にはこれを受け止める多くの論が登場した。世界的にはほとんどロシア非難の声であつたが、

日本ではいわゆる「左派」（あるいはリベラル）といわれる人々からは、「ブーチンだけが悪いのか?」「どっちもどっち」的な傾向が強く見られた。これに対し筆者は、『置文21』第五四号（二二年七月）でこれらの論を「ロシア弁護論」として批判し、今回の事態に至つたロシアの危機そのものを直視すべきと述べていた。それから約八か月、この間の事態をみても、ロシアの行動は、なら擁護されるべきことのないものであることがさらにいっそう誰の目にも明かになっている。何故、日本の「左派」はロシアを直視できないのか?

筆者はこれを、「左派」がかつての既成社会主義国をどう捉えるかという議論を無視している点にあると考える。すなわち、既成社会主義国は一九九〇年前後の「ソ連・東欧民主化」で崩壊し、それらは並べて「市場経済」「ブルジョア国家」に転化したのであり、もはやそれらが何であつたのか、などという議論は無視し得るまでも考えているのであろう。例えば一部に今回の事態を「米（及びNATO）の帝国主義とロシア帝国主義との間の「帝国主義間戦争」と捉える論がみられるが、それが典型であろう。ここでは、ロシアはいつの間にか「帝国主義国家」にされているのである。しかし、これでは六〇年代後半から新左翼として、既成社会主義をどう捉え、どう批判し、どう変革していくべきかとい

う議論をしてきたことを忘却に付すものでしかないであろう。

ロシアの今回の事態は、われわれに改めて既成社会主義国家は何であったのか、それは九〇年にどうなったのか、そのことよってロシア国家はどうなったのかなどという問題を突き出したと捉えるべきであろう。そこで、ここに『精選論集』に掲載されている「前期社会主義論序説」の意義を明らかにしたい。

### 「前期社会主義論」とは

本論稿は八一年に執筆されたものであるが、そのメインテーマは「新たな過渡期論」の形成であった。それを構想するために、既成社会主義の理論的理解を迫られたというわけである。そこでは、当時の多くの既成社会主義規定をめぐる諸見解を取り上げ批判するなかで、氏は、まずこれを資本主義と捉えることに対して「あえて資本主義と規定しない」と強調するとともに、資本主義でもなく社会主義でもない「過渡的社会構成体」という捉え方にも同調しないことを述べ、結論として「枝分かれ行き止まりとなつた、いわば変性し退化した社会主義の異形」(p. 181)という。その背景には、世界的に反革命的介入がなく、成熟した社会的基盤にたつてすらも、前期社会主義への逸脱・変質の難関には必ず逢着する、との捉え方がある。「社会主義がどのような選択で、どのような主体によつて、どのような目的意識をもつて担われるのか」というところが重要である」(p. 175)との認識である。ここは、社会主義を議論する場合、重要な論点といえよう。

そこで、ここではかかる中村氏の前期社会主義規定に依拠して、ウクライナ侵攻に至つたロシアの危機・矛盾の実態を考察してみ

リン専制」へと逸脱し、スターリン死後の「スターリン批判」でもそれを批判・変革できなかったが故に、無意識的にか意識的に、プーチンに受け継がれてしまったといえよう(プーチンはその専制政治を「法的独裁」という言葉で正当化しているようであるが、その内容は理解できていない)。

今日のロシア国家の危機は、かつての前期社会主義国から「新たな国家」に転身を図ろうとしつつも、その「新たな国家」の国家観や国家目的が容易に形成できない危機といえよう。例えば、立憲国家を名乗るブルジョア国家も、誰もが知るように「立派なブルジョア独裁国家」であるが、それとロシア専制国家との違いはどこにあるのか? それは、「ブルジョア社会では・自由、平等のアトミズムのうえに、価値観・価値体系における指導、同意、イデオロギーの側面が優位するから」である。「ブルジョア革命は、社会革命の自然成長的成長にはじまり、イデオロギー革命(天賦人権—社会契約説など)による新しい国家観、国家目的の浸透のうえに政治革命を実現したのであり、したがって、ヘゲモニー概念は独裁概念と共軌的であり、独裁を要しなくともヘゲモニーの不在は一刻もありえない。すなわち「ブルジョア国家はつねにブルジョア・ヘゲモニーであり、必要に応じてブルジョア独裁たりうるのである」その必要は帝国主義段階ではとくに増大し、ヘゲモニーはほぼ独裁と相敵うにいたる」ことになる(中村「精選論集」p. 156)。これに対し、ロシアは先のようなブルジョア国家としての形成過程という近代を有していない。ロシアの近代国家は、社会主義国家としての形成であった。が、それが前期社会主義的に逸脱・変質することよつて「行き止まり」、

たい。まずは、構造(経済)であるが、九一年以降「社会主義」を放棄し、資本主義化に向けて「民営化」「市場経済」などを実施してきたが、それで、既にずつと以前から資本主義的蓄積を進め、いまやグローバル資本主義化した欧米などの競争に太刀打ちできるはずもなく、石油・ガスなどのエネルギーの輸出以外の産業を形成できないという問題を孕んできた。これを補完すべく軍事的・国家主義的政治の専制主義化と、ロシア大民族主義という民族主義の強化によつて、対抗するしかなくなっているのである。ここでは、専制主義国家の問題とソヴィエト連邦解体に至るロシア大民族主義の問題について考えてみたい。

### プロレタリアート独裁の専制への逸脱

今回のロシア侵攻とそれをめぐるロシア国内での言論弾圧の苛烈さを見れば、九一年の政変を「民主化」などと肯定的に捉えてきたことの問題性が確認されなくてはならない。これは、かつてソ連時代に「スターリン批判」がされたことや、ゴルバチョフの「ペレストロイカ」をもつて、それを「ソ連邦の民主化」などと捉えたことと同じ誤りであろう。

前史としてエリティン時代があるとしても、ソ連崩壊後のロシア国家におけるプーチンの専制主義政治をどう捉えるか? 人はそれをかつてのロシア帝国時代以来の専制政治と同一化し、ロシア帝国再興の試みと言うが、歴史は単純に復古することはありえない。むしろ、これはソ連邦時代のスターリン主義専制政治との関連で捉えるべきであろう。一言で言えば、マルクス主義の「プロレタリアート独裁」という政治が、スターリン時代に「スター

崩壊するなかでの、改めての「ブルジョア国家」の形成であり、そこでは「独裁」の基盤をなすヘゲモニー形成ができず、結局、むき出しの専制政治とならざるをえなかったと捉えられよう。しかし、それがいかにグロテスクな政治となり、戦争論的にも非合理的なものとなり、結局失敗に終わらざるを得ないであろうというところは、この間のウクライナ戦局が示しているところであろう。

なお、ここでは概念の基本的理解において、「独裁」と「専制」は厳密に区分されなければならないということが中村氏の「評議会共産主義—その理論的構築のための試論」及び「独裁とヘゲモニー—ブルジョア独裁に関する考察」(『精選論集』第三部の第一章及び第二章)において縷々展開されているので参照いただきたい。

### 連邦制の変質による民族問題

ロシア国家の危機の第二のテーマは、大ロシア民族主義というロシア民族主義のおぞましきである。「ロシア・ベラルーシ・ウクライナはスラブ三兄弟(ロシアが長男)」などの大ロシア民族主義が今回のウクライナ侵攻の大きな根拠づけになっていることは、多くの情報で知られているが、そうしたロシア(プーチン)の主張を、九一年のソ連邦の解体・ロシア国家の創設という問題と関連させて議論した論は管見の限り余り見られない。

最初に一つの素朴な疑問から始めたい。今回のロシアのウクライナ侵攻が決行された際に、国連常任理事国の一角であるロシアが自ら国連憲章違反を行うことの不条理性を指摘する声が上がったが、そこではそもそも常任理事国とは実は第二次大戦戦勝国で

構成されているものであるという実態への疑念は無視されている。が、それは措くとしても、筆者にはもうひとつの素朴な疑問がある。一九九一年にソ連邦が解体し、ロシア国家が国連に登場した際に、なぜソ連邦に与えられていた常任理事国のポストが自動的にロシアに与えられたのかという疑問である。ソ連邦はロシアという発想はどこからきているのであろうか？

一方、ウクライナはソ連邦を構成する国でありながらも、国連には原加盟国として参加しているのである。このチグハグは何を意味しているのだろうか？ 国連問題が議論されつつも、こうした初步的疑念はほとんど論議になっていないのは何故か？

ここで、ロシア革命からの歴史を簡単に振りかえっておきたい。一九一七年革命はロシア革命として始まったが、それはロシア連邦社会主義ソヴィエト共和国として成就したわけではなく、二十二年に「ソヴィエト社会主義共和国連邦」として形成され、以来「ソ連邦」という時代が九一年まで続くのである。つまり、ここではロシアという特定の民族名を付した国家（民族国家）ではないということに留意する必要がある。もちろん、これはあくまで形式的なものであり、実態はロシア国家（それも一応は連邦共和国という形であったが）すなわちロシア民族が支配するソ連邦でしかなかった。が、その成立過程を巡ってはスターリンとレーニンとの「レーニン最後の闘争」といわれる壮絶な闘いがあり、そこではレーニンによる「われわれは、みずからをウクライナ社会主義ソヴィエト共和国その他と平等の権利をもつものと認め、これらの共和国といっしょに、同列にならんで新しい同盟、新しい連邦、ヨーロッパとアジアのソヴィエト共和国連邦に加盟するわ

ア以来の大ロシア民族主義をむき出しにしての軍事的解決を図ることになるのであるが、それはアナクロニズム以外のなにものでもないであろう。例えば、「前期社会主義」であった時期のスターリンは、社会主義からの逸脱・変異ではあったが、「社会主義」という建て前もあって、決して自らの民族主義をロシア民族主義としては唱えず、「社会主義的ソヴィエト民族主義」として展開していたのであり、そのイデオロギー的デマゴギー性は別としても、その程度の芸はみられたのである。純粹に理論的に言えば、ソ連邦という国家の経験は、民族自決と連邦国家的結合という途の両立の可能性を有していたのであり、そこでのマイナスの経験を正しく救い上げれば、ウクライナはそのマイナスを身をもって経験させられたのであるが、今後のロシアあるいはウクライナも含めたこの地方での新たな連邦国家的関係のあり方を示しているのではないか？ が、プーチンの専制政治論はそのヘゲモニー論を欠くがゆえに、そのような豊かな議論を發展させる余地を有していないのである。

### ウクライナ人民の民族的抵抗をどう捉えるか？

今回のロシアのウクライナ侵攻をめぐる日本での対応では、もうひとつウクライナ人民の抵抗戦争への評価とそれへの対応に關して議論が生じた。ここでは、リベラル派にあつては、戦後平和主義もあつて「戦争そのもの」を忌避する観点からの「抵抗戦争」への反発があり、「左派」の側では、ウクライナ国家がブルジョア国家であることとその民族国家主義的イデオロギーへの反発があるように思われる。さらには、補足的にはプーチンの言う

けである」（レーニン全集四二巻「ソヴィエト社会主義連邦の結成について」との提起がされ、スターリンがこれを換骨奪胎して、形式的には「ソ連邦」だが実質的にはロシア民族支配国家にしたという経緯がある。なぜこのような古びた証文をだすのかといえ、今回のロシアのウクライナ侵攻を原理的に批判し、ウクライナ問題を解決する原点がここに存在すると考えるからである。

こうした原点・原理から逸脱し・変異した連邦制の矛盾が、ついに一九九一年のソ連邦解体にいきつくわけであるが、その様相もかなりねじれたものであった。ゴルバチョフの連邦条約の改正（分離の規定の挿入）に反対する共産党内右派のクーデターが起こり、これに反発した「反クーデター」的クーデターがロシア大統領のエリティンによつて展開され、そこでエリティンが反ゴルバチョフという観点からソ連邦共産党のロシア内での活動を禁止し、かつ連邦の解体を宣言する形でソ連邦は崩壊した。こうしたなかでウクライナは独立国家となつたわけである。いわば、棚ぼた式の独立である。ロシア共産党もロシア人民も、これまでのソ連邦という形での多民族連邦国家の総括をしないまま、ただそれを放りだした。これが袋小路に陥つた前期社会主義国家の成れの果てなのである。しかし、連邦制を放棄すれば民族問題が解決されるというわけではない。事実、連邦解体後にロシア・ウクライナ・ベラルーシ等も含め、かつてのソ連邦構成国一一国は独立国家共同体（CIS）を設立するが、そこでもソ連邦時代以来の民族問題の総括に基づく解決へのヘゲモニーはロシア側からは發揮されず、ウクライナはそこから離脱していくのである。

こうして、ロシアの危機は深まり、ついにプーチンは帝政ロシ

「ウクライナは反ロシア的な政権」「米やNATOに支えられた傀儡政権」などというかつての「体制間対抗」的理解もあるように思われる。この点は、かつての（われわれの）時代のベトナム戦争への対応とは真逆である。当時の新左翼は、「米のベトナム侵略粉砕・ベトナム人民の革命戦争支持・連帯」というのが、一般的であった。この落差はどこからくるのであろうか？ ベトナム戦争では侵略者が米帝国主義であり、ベトナムの方はベトナム労働党（共産主義者）が主体であったのに、今回の事態では侵略者がロシアというかつての社会主義国家であり、抵抗者の方ではそのバックに米やNATO等の帝国主義者がいるということ、旧来の発想からは単純にウクライナ支援といいにくいということであったのか？ また、イデオロギー的にはウクライナの抵抗は「民族主義」であり、階級的ではないとの理屈もあるのか？ こうして、古くからある「民族主義と階級闘争」という問題がその根底にあるように思われる。筆者は、明確にウクライナ人民の抵抗戦争をウクライナの民族自決の戦いとして支持するものである。

問題の核心は、民族、民族問題、民族自決権をどう捉えるかである。プーチンは二〇二二年二月の演説で「現代のウクライナは、・・・ボルシェビキ、共産主義ロシアによつてつくられたものである」「レーニンと仲間は、歴史的にロシアの土地であるものを分離し、切断するという、ロシアにとつて極めて過酷な方法でそれを行いました」と述べて、ブルジョアの民族自決権をすら真正面から否定しつつ、他方でウクライナ四州の併合に当たっては、「住民の分離する権利」等を振りかざしてこれを正当化するという、極めて便宜主義的論法を用いているのである。

ウクライナの歴史に詳しい中井和夫氏は、九八年に出版した『ソヴィエト民族史—ウクライナ一九一七—一九四五』で「民族自決に基づく『国家の急増』が、国際社会に与えてきている負荷・コストの大きさ」に触れて「民族自決」を「民族自治」にかえていくことと「多民族の平和的統一の政治的システムとしての連邦制の可能性」を論じているようである（ここは孫引き）。これは九八年出版の書での論であるが、氏はその前に、ウクライナ独立以前の九〇年に執筆の「ウクライナ—静かな弟？」（『分裂するソ連』NHKブックス掲載）においても、ウクライナ人民の大衆運動が政治的独立に向かおうとしている動向を捉え、これを「ウクライナにとってもロシアにとっても、ソ連全体にとっても大きな危険を有する」と論じているので、氏にとつての先の認識はこの当時の確信的なものであったと言えよう。しかし、こうした認識は国際関係論的民族論からするリアリズムの議論としてはあるとしても、民族自決権をブルジョアの自治権に矮小化する誤った理論であり、結局は「行き詰まり」の危機に瀕して、なりふり構わぬ専制政治と民族抑圧に向かうプーチンを救済するものであり、断じて認めることはできない。

こうした主体の混乱の背景には、民族・民族問題・民族自決権をめぐる理論的混乱が存在するのではないかと考え、それを解きほぐす観点から、以下、中村氏の「民族問題の歴史的形相」（『精選論集』掲載）と題する論稿を紹介してみたい。

## 二 中村氏の民族理論を読む

この論稿は八三年に執筆されたものである。筆者は「解題」で

ものへの無関心がある。戦争はあつてはならない、国家は要らないなどといったも、現に戦争は起きており、国家は現実に存在し、誰もそこから逃れられない。そうしたなかでは、やはり現存の民族・民族主義理論を知り、批判し、変革していく理論的作業が問われてくるといえよう。

### 社会学的民族理論

「スターリン的民族概念の破産」と題する章では、スターリンの民族に関する諸論文をあげつつ逐一批判するが、ここではその内容は略す。氏の論点はむしろこのスターリンの民族理論を批判して出された、高島善哉氏などの「自然的・社会的風土の地盤」「母体としての民族、主体としての階級」等々の民族概念の社会学的精密化の試みの考察・批判に向かう。とはいえ、直ちに高島理論の検討に入るのではなく、その前提としてヴェーバーの強大な影のもとにあった日本の社会学者の代表的な民族概念を振り返ることから始める。それが「社会学的民族理論の限界」と題する章である。そこでは新明正道、高田保馬、小松堅太郎、白井二尚、石田英一郎等の説が紹介、考察される。最も大きく考察されているのは新明氏の論である。

中村氏は新明氏の民族理論を「民族の本質を規定するにあつたての従来の形式社会学的な主観説（心理的側面の重視）と客観説（自然的ないし文化的側面の重視）」をとともに却け、また両者の総合説をも却け、客観的側面と考えられてきた文化的・社会的因素とともに『おのおの総体的全体をかたちづくる主体的契機として相即的な意義を持つ』として、むしろ民族社会の『形式的（自

これを「スターリンの民族理論が依然として批判・止揚されていないことから、それへの批判として始まり、日本の社会学的民族理論、政治学的民族理論の代表的論文を取り上げ批判しつつ、階級闘争における民族問題の位置づけ、民族理論の理解を深めるものとなつている」と紹介していた。ここでは、よりその内容にまで踏み込んで、前述のロシアのウクライナ侵略をめぐる議論の混乱を捉え返す一助としたい。

氏はまず、マルクス主義の理論の世界でいまだにスターリン主義が大手を振って罷り通っている領域として民族理論があるとし、その背景には民族問題の解決が国連憲章的ブルジョアの民族自決権の原理にもとづき、既成の民族国家ないしは民族国家たるうとする被抑圧人民の間の枠組みに押し込められているという現状があるという（この辺は、クルド民族問題等として理解できよう）。そのうえで、氏は帝国主義国プロレタリアートに対し、「帝国主義国プロレタリアートは、帝国主義的民族プロレタリアートたることを自己止揚しようとするならば、自己自身の問題として、民族概念はじめ民族理論の変革に取り組まなければならないであろう」と述べる。この指摘は重要であろう。

前述したように、今回のウクライナ民族・人民の抵抗闘争への支持に冷ややかな態度を示す人々の間では、「帝国主義国ではプロレタリアートの階級闘争こそが重要であり、民族主義に迎合することになつてはならない」とか、「そもそも民族・国家・人種などという区別にかかわらず、『世界市民』として支援するべき」などの声がみられる。そこでは、自らが帝国主義国民族プロレタリアートであるという自覚の欠如があり、民族や民族主義という

然的（要素」と『内容的（心理的および文化的）要素』とを主体的契機として総合する視点と方法に立ったところにある」と要約し、これは「それなりの前進」と一定に評価しつつも、なお疑問を提起している（内容の紹介は略）。同時に、その民族理論の背景には「生々しい民族問題への姿勢がひかえている」として、戦前の「東亜協同体」「大東亜共栄圏」の時局の下では、「異民族の結合体は一大民族の生成に到達するものである」（「中小民族がその限界にある）現状は中小民族の合理的な適応性の欠如と判断すべき」などとして、「一民族一国民的」な民族主義を超えた「多民族一国民的」な国民主義の唱道」に至ると指摘する。すなわち、「大民族の独占的支配による国家主義、帝国主義であつてはならないが『われわれはこの国民主義を東亜の諸民族にも適用しようとするものである』と。

しかし、中村氏の指摘はさらに戦後にも及び、「大東亜共栄圏」が崩壊するや、新明氏の民族論は「自足的民族主義への復帰」として、「民族自決主義の修正であると同時に拡張的民族主義をも揚棄する第三の方式」すなわち『民主主義と緊密に結合せしめると同時に原子的個人主義にもとづく『民主主義のこれまでのあり方においても歴史的修正を加え』た、民族主義の『合理的調整』を展望していると紹介し、これに対し、「戦後民族民主主義」というよりも、根源的な日本ナショナリズムの恐ろしさ」と喝破するのである。この辺は、戦後民主主義の下で育ち、その欺瞞を告発しようとしてきたわれわれの世代の「新左翼」にとつても、この戦後民主主義に潜む日本ナショナリズムの対自化の弱さ—戦後民主主義に隠された日本ナショナリズムの問題性を突き出しえ



なかつたという限界を示唆していよう。氏は、この章の最後で歴史学者の民族理論にも触れ、その多くは日本民族民主革命の政治的教条に呪縛されているとして、江口朴郎氏の「民族意識がしばしば民衆が集団的に行動する場合のもっとも切実な主体的契機」「いかなる変革にも現実にはそのような（民族的意識＝歴史的主体という）表現の仕方を通じて行われる」を示し、また藤間生大氏の「・・・ナツイオンの場合は、経済生活がいちじるしく発展しているので、その結合はいちじるしく密接であるし、人民的な要素がよくあらわれる可能性がある。・・・当面の階級闘争が民族解放闘争というやり方でおこなわれることができるし、またおこなわざるをえなくなってきた」を示している。

このように、社会学的・スターリン的民族概念が、日本ナショナリズムに奉仕したことを論証した後、やつと「ヴェーバーと高島の位相」と題して、高島の民族理論の検討に入る。とはいえ、ここでもまずはヴェーバーから始める。ヴェーバーの民族理論については、民族を成立させる媒介契機は「政治的共同性の形成」という理解であるとする。そして、「彼は、本質的には『文化の担い手として意義を持つ総体の直観的全体』として、民族を把握する。それは、国家とはただちに同一ではない。しかし、民族の頂点には、やはり、極限的には、『防衛共同体』たる国家がある。ヴェーバーのナショナリズムは国家主義に昇華する」という。とはいえ、氏がこのヴェーバーの民族理論を「苦渋に満ちた」ものとしてみているところに留意すべきであろう。

次いでいよいよ高島氏の民族理論の考察である。ここでは詳しい内容の紹介はできないが、その要点は、①「民族は母体である、

主体は階級である」、②「すべての社会学者がヴェーバーに倣つてあえて意識的に避けてきた『人種』や『血統』の要素が、民族にとつて直接的に規定的なものとして、そのものずばりもちまわっている」ことなどである。民族が「実体」ではないが「母体」であるとされるのは、プロレタリアートが民族の主体として、「氏の説く『革新的』な『民族主義的ナショナリズム』の担い手となつてほしいという、主観的愿望にもとづくこじつけにすぎない」と厳しく退ける。そのうえで、改めて理論的な批判を五点上わたつて行っているが、ここでは省略する。

本章の最後で氏は、「政治的共同体、自然共同体といつても、それはもとより、階級社会にあつては本質的に仮象、擬制であり、それ自身が政治的にうみだされたものである」とし、「もはやいっさいの社会学的民族理論を超えて、政治学的民族理論に進まなくてはならない」として、「政治学的民族理論の含蓄」と題する章に移っていく。

### 政治学的民族理論

ここが、われわれにとつては最も重要なところといえよう。氏は、政治学的民族理論の開拓者として今中次麿氏をあげ、その検討から始める。まず氏は、「今中氏の方法的端緒は、『対立矛盾する社会階級を一つの支配のもとに綜合統一する機能』としての政治権力の、その統一支配の基礎を問うことである。それは民族共同体以外には求められない。『社会階級は民族共同体の内部的矛盾として存在し、その矛盾の抑圧の必要が民族共同体における統一支配を成り立たせている。』この『民族共同体』の意識的統一

の根拠をなしているのが、民族意識である」と捉え、氏はこれを「階級矛盾、階級闘争と関連させて民族の本質に接近する態度」で、これは「絶対的に正しいと考えられる」という。次いで、今中氏の民族の定義の検討がされるが、その詳しい内容は余りにも専門的すぎて、簡単には紹介できない。中村氏の強調点だけを摘記しておく。

①階級闘争と民族闘争とが政治的次元で統一のとらえられているが、階級闘争の民族、民族闘争への根源的規定力は認められるかという問いに関して、今中氏は「それを黙示的に認めているようである」としつつも、階級からまったく解放された社会が将来出現すれば、民族共同体は民族共同体に変革され、「民族はひきつづき社会の集団統一的主体として残存することは可能であるが、しかしそれは厳密に支配から解放され、矛盾を内包しない、領域的な、意識と文化の統一的共同体となり、民族的自決の基礎に立つ民主的自由団体とならなければならない」とすることに對して、そこに「一国社会主義へのそれなりの評価が含まれているとすれば、甘きに失しよう」とコメントし、階級—民族にかんする氏の論理からすれば、「『社会的共同意識』としての民族は、即時死滅に向かわなければならないであろう」というものである。この点も「民族死滅論」の理解として重要であろう。

②民族共同体—民族意識そのものを成立させる主体が、さらに問われなければならないとして、今中氏の論では「同意と強制、民族意識と階級意識の二元論を脱していないのではないか」という疑念を示していることである。氏は「階級と民族のデ・ファクトの二元論は超えられなくてはならない」という。

とはいえ、氏は今中氏の政治学的民族理論の意義を「階級闘争と民族闘争の緊張関係をあくまで政治的に捉えようとする点で、きわめて示唆的である」と高く評価し、これはレーニンが「政治とは、諸民族の関係、諸階級の関係である」と語ったことや、グラムシが「哲学＝歴史＝政治」の同一性から「すべてが政治である」と語つた地平につながるものであり、この地平にひとたびは立たない限り、民族問題は諸民族の民族闘争の個性性に埋没し、「民族主義—社会民族主義」の泥沼からはいあがれないであろうという。そして、前述の②の主体の問題を一步深める地平として前野良氏の政治学の考察に移る。

前野氏は、民族が権力関係の歴史的変動をつうじて再構成されるものであることを最初に強調した人であるとし、民族共同体と階級との関係についての次の主張を紹介する。

「政治は、社会の階級制の存在と不可分であると同時に、階級はまた、一定の生産方法、生産力の性格によって形成された『政治的共同社会』と不可分である。政治的共同社会は・・・さまざま機能をもつた集団が同一社会において、法的諸関係によって同一秩序のもとに生活している共同体であり、それは内面的には、階級支配によって構造化された共同体である。・・・この政治的共同社会は、各民族によって、その歴史性を異にしている。一定の時期においては、民族的政治意識によって裏付けられており、階級意識とこのような共同社会の歴史的意識である民族意識との矛盾と総合のなかに、政治の本質が存在している、と言つてよいであろう」

これを中村氏は、「今中氏の方法における二元性は『階級的支

配によって構造化された」との規定により乗り越えられようとしているかのごとくである」と評価し、この『構造化』のシステムは、グラムシが開拓した階級の民族的—人民的（ナツイオナーレ・ポポラーレ）ヘゲモニーとそれを担う知識人の理論を採用するなどして、いつそう精密化しうるであろう」と述べるのである。

これが、中村氏のさしあたりの結論と言えようか。そして、氏は最後の最後に「われわれが求めてやまないのは、現下の、歴史の現局面の生きた民族闘争に膚接し相即しての革命的に政治的な民族理論なのである」という。これが、氏の政治的メッセージであろう。われわれは、この度のロシアの余りにも醜いウクライナ侵略戦争に対し、民族的・人民的に抵抗しているウクライナの人々の民族的抵抗闘争に際し、民族理論、民族主義についての革命的発展の観点から注視し、議論していかなければならないであろう。

## 終わりに

最後に、もういちど最初のロシアの問題に戻り、ではロシアのかかる現実を变革していく方向はどのように考えられるか？という問いを設定してみたい。それについても、中村氏は前述の「前期社会主義論序説」では「第二次社会主義革命」と述べている。その具体的イメージは八〇年に出現したポーランド労働者の「連帯」大運動であった（『精選論集』第VI部第2章「ポーランド労働者革命の源流」参照）。もちろんこれは、未だ「前期社会主義」が崩壊する以前での提起であり、前期社会主義としてのソ連邦が自己崩壊してしまったという事実を経た現在においても、それがそ

のまま通用するかという議論はありうるであろう。とはいえ前述したように、ゴルバチョフの「ペロストロイカ」が挫折し、さらに九一年でのソ連邦解体—「民主化」「市場経済化」という「民主化」なるものの成れの果てとしてのロシアが、今回のプーチン専制・ウクライナ侵略という結末に至っているという現実を直視するならば、こうした歴史的限界を超えるロシア変革の途を真剣に議論する必要がある。中村氏の提起した「第二次社会主義革命」は、それを考える際の、一つの重要な提起と言えよう。筆者は現状のロシアの実態をさらに考察しながら、この論をさらに深めていきたいと考えている。

# 薄明の頃

## —一九六〇年代中盤学生運動回想—

前田 浩志

### 1、時代の雰囲気

一九六二、六三、六四年は、私の高校生時代であった。弁当持参のバス通学で、まあ、恵まれた高校生活を送っていた。世は高度成長であったが、謄写版の筆耕職人の家には大した変化もなく、都立高に通えただけでよし、とする感覚であった。先年、地下鉄丸ノ内線の新宿以西延伸が成り、新宿まで三駅の速さに驚いたくらいが、目立つ変化であった。

高校では、美術教師の関口茂先生の勧めで、美術部に入っ、一応部長まで務めた。社研もあったが、六〇年安保後の沈滞の中にあり、溜まり場の存在に止まっていた。六〇年安保闘争の頃は活発で、その際の赤旗が空しく残っていた。というのは、高校側が生徒の政治活動に禁圧的で、とくにビラまき禁止など、情宣活動を退学などの言辞で脅していたからである。もちろん、秘密に置きビラをするなどの手段はあると目されていたが、私の見聞では、敢えてそれをする者はいなかった。

私も社研部室に出入りする一員に止まり、正式部員にはならなかった。ただ、友人の影響で『共産党宣言』くらいは読んだが、その他派批判の内容は、独学ではなかなか馴染めず、暴力革命・プロレタリア独裁の言説も認められなかった。

進学校であったので、第三学年になると、クラブ活動から手を引いて受験勉強に専念するのが、風習のようになっていた。私も六四年はそれで過ごした。

しかし、今から考えてみると、世の中には戦後左翼文化の影響は、なお残っていたように思う。たとえば、音楽の教師は「自分は右翼だ」と自称するような人物であったが、授業のスタイルはまったく左翼的で、アコーデオンを抱えて、合唱に明け暮れていたのである。しかも、関鑑子監修の歌曲集によって。また、工芸の教師は（私は工芸は選択しなかったが）筋金入りのエスペランティストで、自らエスペラント部を率いていた。美術の関口先生は中国戦線帰りで、自ら固疾を負っておられた。しかし、芸術至上主義的熱情をもって生徒を指導され、教え子の中から画家が輩出した。

私は、美術室や社研部屋に出入りするだけでなく、図書館にも入り浸った。読んでよかったと思ったものは、柳田国男の『遠野物語』と『莊子』（内篇）であった。後者では、同高校が旧制中学からの流れがあり、漢文の教師に恵まれていたことがあるかもしれない。

結局、大学の志望先は、今は廃校とされてしまった東京教育大学（文学部社会科学科社会学専攻）とした。当時、卒業生の半分

は教員になるといわれた同校だが、教員をめざす気はハナからなかった。親戚に教員が多かったからでもある。さほど社会学に對する予備知識があつたわけでもない。法律とか経済はイヤだな、と思つただけである。

## 2. 大学の風景

以上のように、絵の道も断つたかたちで（そこまでの才能はないと思つた）、ふらふらと教育大の茗荷谷キャンパスに通うこととなつた（文・理・教育学部は同地にあつた）。丸ノ内線で一回りして、茗荷谷まで。便利はよかつた。しかし、この方向の定まらなさは、今から考えれば、「危険」なことであつた。

一九六五年の教育大には、一九歳の青年にはあまりに毒な、刺激の強すぎるものが渦巻いていたからである。叙述の便のため、簡条書きにしてみよう。大枠、時系列である。

- (1) すでに同大学の筑波移転の問題が白熱していたこと。六三年段階から始まつた同問題は、移転派優勢のうちに外堀が埋められてきていた。同大学の同窓団体（茗溪会の主催で、六五年新入生を全員招待する大歓迎会が開かれたが、それも移転推進派の懐柔策と言われていた。）
- (2) 入学早々、学生食堂の貧弱さに対する、主に新入生の不満が爆発し、食堂闘争が燃え上がったこと。食堂問題という、末梢的な問題に聞こえるが、学生の食生活が貧しかった当時としては、かなり普遍的問題で、いろいろな大学で食堂闘争が取り組まれた、という事実がある。これで頭が闘争モードに切り換わってしまった。——それは、当時の学生運動の情動的な転換

点をほの見せていたと思う。六四年の慶應大の学費値上げ反対の大ストライキは、大きな影響を与えていた。これは初めてのバリゲード・ストであり、六〇年安保の街頭デモを超えるエネルギーを秘めていた。教育大でも、意識的にそれに続こうという志向は芽生えてきていた。

- (3) それにしても、学内の政治的・組織的な厳しい対立を突きつけられ、政治的選択というのを避けて通れなくなつてしまつたこと。もちろん、この対立は右翼と左翼ということではなく、左翼の中のそれである。私はその辺の知識がほとんどなく、日本共産党系の民青があり、社会党が社青同を作つたくらいしか知らなかつた。しかし、学内では、共青と民青の二大勢力が鋭く対立していた。社青同はなく、社学同の小勢力があつた。共青（日本共産主義青年同盟）は、一九六一〜二年に日共に分裂があつて、社会主義革命派が創つた社会主義革新運動（組織名、略称社革）の青年組織である、と知つた。学生自治会はもちろんのこと、サークル、教室（専攻）の中で、双方は激しく張り合つていた。私の社会学専攻では、共青の重鎮として高村広昭氏がおられ、對する日共民青の論客もいて双方から働きかけを受けた。——しかも、さらに厳しいことに、一九六五年春は、双方の力が交叉する時でもあつた。どういうわけだかまかつたく私にはわからないのだが、共青の結集力が急激に落ち、当時、六〇年安保後の惨状の中から確実に盛り返してきていた日共民青系が、文・理学生自治会選で勝利したのである。この前後の双方の応酬の中で、日共民青の横暴を見ざるをえなかつた私は、しだいに共青側に力を添えるようになっていった。

- (4) 六四、六五年は日共に次の分裂があり、いわゆるソ連派が脱党して、その影響が間接的に教育大にも及んできたこと。志賀義雄、神山茂夫らが、日本共産党日本の声を名乗つた一件であるが、教育大の日共民青には、さしたる動揺はなかつたようだが、学生戦線では民青を割つて、民学同（民主主義学生同盟）

が大坂などで発足した。この工作線が早くも東京に及び、志賀義雄の議員秘書、生駒某が、東京で民学同を組織化すべく、教育大に触手を延ばしてきたのである。若干名の秘密（共青に對して）サークルが作られ、その外側に緩い若手学生のプールを設けるつもりだつたのかと思う。「民主主義研究会」というサークルが立ち上げられ、六五年夏、合宿まで行なつた。私も専攻の先輩の引きで、それに加わつた。そのうち秘密サークルのほうにも誘われ、喫茶店での会議、合宿に連なつた。——しかし、それらは順調に進まなかつた。後から思うに、六六年に近くなると、いわゆる「共産主義者の結集」問題が生じたからではなかつたらうか。六〇年代初頭に分裂した社会主義革新運動と、新たに分裂した日本の声を中心として、新党を創る構想が、当時動き始めたのである。私はそんなことにはツンボ枚敷で、共青の側もそこから疎外されていたと思う。

- (5) 一九六五年は、ベトナム反戦闘争の始まりの年であつたこと。大情況が後になつて申し訳ないが、トンキン湾事件、北爆開始というベトナム戦争の本格化があり、腰の重かつた日本の反戦運動も、ようやく形ができてきた。六月九日の知識人呼びかけによる久保講堂集会↓デモは久々の盛り上がりとなり、私の正式なデモ初参加となつた。社会学専攻の学生も大挙参加した。

夏休みに入つては、共青肝煎りの「軍縮ゼミナール」・ベトナム反戦臨時大会もかろうじて行なわれた。吉川勇一氏らのベ平連の運動も動き始め、新しい反戦闘争の構造が創られようとしていた。

- (6) 六五年秋には、日韓条約反対の闘争が昂揚したこと。学生運動は(2)で触れたような構造的な変化を見せていたが、六〇年安保以来の左翼指導部（とくに全学連主流派系の）の眼は、折からの日韓基本条約締結への反対闘争を組織することに向けられていた。社会党・共産党の北朝鮮抜き締結反対という論調に比べ、日本帝国主義自立論の観点からの批判は、正当なものがあつた。街頭デモのイニシアチブは、新三派連合（社学同・マル学同中核派・社青同解放派）の都学連にあつたが、教育大では、唯一保つていた農学部自治会の旗の下で闘うこととなつた。

- (7) 国際的には、中国の文革の始動、それと日中共産党の関係の急転、もう忘れられているが、インドネシアの9・30事件と赤狩り大虐殺があつた。とくに9・30事件のことは、民学同サークルで議論したことを妙にハッキリ覚えていて、共青が大枠ソ連派だつたこともあり、文革に対しては冷ややかであつたように思う。

このほかにも、社会学専攻内でのこまごまとしたこと、東京図書生活協同組合のこと、グラムシの著述に触れ始めたこと等々、一九六五年には、実に様々なことがあつた。そういう時節だったのかもしれないが、やはり、刺激が強すぎたのである。

### 3、「僕がコムソモールだった頃」

日韓闘争が一段落して、秋の自治会選が（残っていた農学部も含めて）敗北すると、この八カ月余を突っ走ってきた私も、自分の身の振り方を考えざるをえなくなった。

硬派で突っ張っていくしかないと考え、共青に加盟することとした。落ち目の組織であることは分かっていたが、却って自由が利いて面白いくらいに軽めに思っていたのかもしれない。①メンバーの人物がよい、居心地がよい、②組織は正統である、③革命のイメージを持っている、辺りが評価の要点だったのだろう。民学同からの逆オルグもあったが、私の気持ちは決まっていた。冬には共青合宿（高尾山裏の「大悲閣」）に参加した。

共青の組織生活は、どうだったのか。本当はそれを懐かしみたいのだが、その紙数はない。右記中見出しの「コムソモール」についての言えば、それはかつてのソ連邦共産党の青年組織の略称で、共青教育大支部がその機関紙の題名としていたものである。B4判裏表のガリ版刷りであったが新聞形式で、かなりの影響力があった。

私にとって次の画期となつたのが、六六年春の文自治会選への立候補であった。前年秋の立候補者であった高崎宗司氏の指名の形で、私が委員長候補、副委員長候補としては西洋史の桑原学君が決まった（六五年入学、非共青）。

やるしかないと思ひ出したわけだが、結果は惨敗であった。しかし、これで文自治会における野党活動の責任を負う立場になり、平の共青同盟員というわけにはいけなくなった。このほか、六六

も、統社同の東京の指導者、安東仁兵衛氏は直接に学生部隊を指揮しており、生駒某とは比べものにならなかった。すでに学内に統社同系のサークルが作られており、小畑精武氏がその中心であった。

彼らと争うことはすでにできなかった。ベトナム反戦闘争のイニシアチブを彼らに委ね、随伴する途をとるしかなかった。そのかたわら、共青再建の手を打つことこそが必要であった。いくつかの動きがあった。

(1) 先述の金井敏博氏が着手した連絡紙『通信（仮題）』の試み。共青（東京の）は学生しかいなくかわらせず、その卒業生を組織することはまったくできていなかった。そこを埋めるものとして、横組みタイプ刷りの連絡紙が発行された。

(2) 古参同盟員で、かつて文自治会委員長を務めた入江勝通氏を中心として、「共青東京学生委員会」の追求があった。共青東京都委員会はすでに消滅して久しいが、残余の主体は教育大以外にもあり、それらを糾合して紐帯を再建しようとしたのである。といつても支部的に残っているのは、慶應大、埼玉大、東京学芸大ぐらいで、中央大（Ⅱ部）、法政大などは、この時点では、連絡がつかなくなっていた。

(3) 教育大の六四年、六五年入学の同盟員の中には、共青を再編して学生同盟としていく考えが芽生えてきた。ほとんど関係はなかったといつても、上部組織であった社革は、前記の「共産主義者の結集」問題でなくなるうとしており、同問題では共青は「おいてけ堀」にされていたからである。

年に取り組んだ主な事々を想起してみたい。

(1) いよいよ押し詰まった筑波移転問題に対して、「未来像なき筑波移転反対！」と、反対の旗幟を鮮明にしたこと。これは、共青の大学生協運動の指導者、金井敏博氏のイニシアチブによるものであった。

(2) 社革―共青に残されていた唯一の足場であった教育大学生協の指導権をめぐって、日共民青と争ったこと。結果としては敗北した。

(3) ベトナム反戦闘争の追求のため、「教育大ベトナム反戦行動委員会」をつくり、恒常的に街頭行動を積み上げていったこと。全都的な行動組織として「ベトナム反戦共闘」が創られ、これに結集した。ただ、これらは共青のイニシアチブではなかった。

(4) 六五年からうじて開催された「軍縮ゼミナール」はおくびにも出ず、運動の構造が変わってしまった。原水禁運動のみに何とか関わった。

(5) 共青独自のイベントとして、一〇月、ロシア革命記念日集会が開催された（講師・津田道夫氏）。これが、この種の集会の最後のものとなった。

六六年に入って一番の問題は(3)にあった。六五年中で共青のヘゲモニーが失墜したことが明らかになり、前年の民学同の策動に代わって、統社同（統一社会主義同盟）が動き始めたのである。こちらははるかに面倒であった。統社同は社革が発足してすぐそこから分裂してできた組織で、かなり親近性があった。実は、統社同同盟員であるが共青に加入している者もいたのである。しか

結局(2)の途は成功せず、教育大単独で、(3)の途をとることになっていった。合宿（於伊豆大島）で意見交換を深め、冬のうちに新規約を確認して、共産主義学生同盟教育大支部を発足させた。しかし、陣容は十数名、往年の共青を知る者からすれば寂しい出発であった。しかし、メンバーには、ギリギリに追い詰められた地点で、劃線を明らかにして再出発する意欲だけはあった。共青が再編すると聞いて、「我こそは最後の共青同盟員に！」と、急遽加盟する者もいて、力付けられた（その一名が根井康之君であった）。機関紙名と赤旗は共青を引き継いで「コムソモール」とした。今後の運動路線としては、「大学改革」を主軸にすることも確認されていた。

六七年が明けて、発足を情宣すると、早速、日共民青は「支部が一つしかない」と嘲けた。しかし、時期はまさに間に合ったのであり、同年二月初の「建国記念日の日」に対する全学的反対闘争に際会することができたのである。この闘争こそが教育大の激動の時を切り拓いたことは、今も想起されるべきであろう。同年春の筑波ピケ・スト、六八年の学長選↓筑波バリ・ストと、闘いは打ち続いた。

### 4、共学同から社労同へ

以上のプロセスの中でも、組織的問題が二つ残っていた。一つは、学生組織を志向するとしても、その在り方をどう考えておくのか、率直には、統社同とその学生組織である社会主義学生戦線（フロント、教育大にはまだ作られていなかった）との間柄をどうするか、ということであった。

共青同盟員と、統社同盟員およびそのシンパとを一丸として、教育大単位の学生組織を創る手もあったからである。量的な意味では良策である。しかし、この方向に私は賛成できず、相互の交渉も開かれなかった。

もう一つは、密接に繋がる、上部組織をどうするのか、という問題である。この点では、日共と民青のような指導―被指導関係を考えることは、初めから否定されていた。すると、共産主義学生同盟の同盟員個々が選択をする、ということしかなくなる。

実際的には、ここでも統社同か、それとも「共産主義者の結集」に反対して、六七年年頭に社労同（社会主義労働者同盟）として発足することとなる、中村丈夫氏を中心とする政治グループかの、二つの選択しかなかった。曲折した「共産主義者の結集」の果てに発足しようとしていた共労党（共産主義労働者党）については、テンから関心がなかったからである。

このための学生同盟員の合議の中で、結局、共労党と統社同の双方に対して、この間の経過を報告し、共学同（共産主義学生同盟）の発足を伝えよう、ということとなった。使者が特別に立てられて、教育大共青の最後の身の振り方が明らかにされた。

同時にこれは、共学同からの両組織への合流はない（つまり、社労同をめざすグループに与する）ことの説明でもあった。先述した金井敏博氏にしても、入江勝通氏にしても、中村丈夫氏とは昵懇であり、私も面識を得ていたからである。

ただ、この社労同への参加については、原則からして同盟員個々に任されていたため、結果として社労同に参加する者と、しない者とが別れた。社労同に加盟した者たちによって、本来は社労同

支部が形成されるべきであったが、それは残念ならなされなかった。その暇がなかったの一語に尽きるだろう。

統社同のほうは、六八年の夏まで、フロント（社会主義学生戦線）を作るのを控えていた。私も再度、六七年春の文自治会選に、統社同系の田島秀実君と組んで、立候補したりしていた。最後まで、友好関係は続いたと思う。

その前の二月に、社労同の創立総会があり、私はオブザーバーとして参加した。中村丈夫氏はともかく、社労同の陣容その他について、私はよく知らなかった。選択の理由は、①共学同をとにかく創ったという責任があること、②統社同に対して良い印象を持っていなかったこと、にあったのではないだろうか。ともかく、学内に続いて、この創立にも間に合ったのである。

本来、本誌本号所収の「解散お知らせ」正文が、一九六七年度の社労同発足から始まっているので、その前のことを補ねばならないのではないかと、ということがあった。しかし、私には学生運動の知見しかない。それでも何かの足しにはなるだろうと、大石編集長にお願いして駄文を書かせていただいた。

人名、組織名には気を遣ったつもりである。先輩には氏を付し、同輩、後輩には君を付けた。『コモソモール』は一九六九年夏ごろまで出されていたが、時局に適應せずということと廃刊された。六〇年近く前のことを綴っていると、物狂おしいばかりである。お笑いだいたい。

## 資料 評論会的変革のための協働委員会（フェニックス事務局） 解散お知らせ

（編集部注）二〇二二年五月二二日（日）、中野区中野にある貸会議室において、評論会的変革のための協働委員会（フェニックス事務局）の第四回総会（通算第二四回総会）、解散総会が開催され、約五五年間に及んだその組織活動に幕が降ろされた。

出席は、正会員四名、準会員一名、オブザーバー一名であった。地方の準会員一名より、欠席の申告があった。

総会においては、一九六七年に社会主義労働者同盟として発足して以降の、新左翼政治派としての活動、その足跡について詳細な報告を受け、若干の質疑のあとこれを承認。また、友誼団体や『置文21』読者の方々に対して、長年の協力への御礼とともに、解散の挨拶を送ることとされた（別掲「解散お知らせ」）。

メンバーからは、フェニックス事務局解散の後においても、中村丈夫研究誌『歴史と主体』の終刊号の早期発行を期すこと、また『置文21』誌のしばらくの刊行に賛助協力を継続していくことが表明され、閉会した。

なお奮闘されている諸党派のみなさん、各地各戦線で健闘されている諸運動団体のみなさん、そして広く労働者・住民のみなさん。

私共、評議会的変革のための協働委員会より、私共の解散についてのお知らせを申し上げます。私共、ほぼ五五年にわたり活動してまいりましたが、近時、有力な同志が死去あるいは重病に陥るなどもあり、その隊列を減じてまいりました。何より、定期的な会議を行ない、情勢を議論し、できうれば発信・唱導をしていくという私共にとつての基本的機能を果たすことが難しくなりました。

そのため、去る五月下旬、協働委員会自体の持つていき方について総会を開いて討論し、正式に解散することを決定し、関係各位へ文書をもってお知らせして永年の御友誼に謝することといたしました。誠に有り難うございました。

1

私共は去る一九六七年年頭に、東京・後樂園の中央労政会館にて創立総会を持ち、社会主義労働者同盟として発足しました。議長格は故中村丈夫、書記長は故小塚尚男、機関紙担当は故藤原春雄の各氏でした。ベトナム反戦、大学闘争を中心とする六〇年代終盤の昂揚の中で、社労同は先進的に奮闘し、党派的にもいわゆる構造改革派四派協議（社労同、統一社会主義同盟、共産主義労働者党、統一共産同盟）に批判的に介在し、また共産主義者同盟、第四インターナショナル日本支部、日本マルクス・レーニン主義者同盟などと連携しながら、いわゆる新左翼八派統一戦線の一翼を担うこととなりました。学生戦線では、共産主義学生同盟と提携しました。

しかし、六九年後半の七〇年安保闘争の展開をめぐる総括から、

急速に反対派が形成され、それが指導機関を占拠するという事態が発生しました。組織は混乱しましたが、翌七〇年夏、全同盟員会議を開いて、分派Ⅱ社労同共産主義委員会を形成。さらに同年一二月に、東京・大井町の南部労働政会館において、青年共産主義者委員会の創立総会を開きました。社労同は、指導機関を占拠した部分（機関紙『赤焰』を発行）、社労同機関紙名『新左翼』を続刊した部分、そして青共委（機関紙名を『曙光』に改題）として三分解することとなりました。

青共委の第一代委員長は佐山潤（Ⅱ故金井敏博）が務め、共産主義的党派への形成をめざして、「レーニン主義の新生」のスローガンを掲げました。実践的には焦眉の課題となっていた沖繩闘争に投入し、「沖繩人民自決支持！」の綱領的スローガンを打ち出しました。また、念願であった労働運動への再着手も始められ、左翼分裂少数派組合運動を突破口とすることが唱導されました。これら戦術面だけでなく、理論面、組織面でも新しいものを積み上げながら、青共委の活動は厚みを増し、第二代委員長、建部賢一へと引き継がれていきました。その頂点ともいえるべきものが、八〇年代に起こったポーランドの独立・自治労組「連帯」の大運動を支援する運動でした。また、綱領的スローガンとして「評議会共産主義」を掲げたことも特筆すべきことでした。これは、晩期レーニンから、ヨーロッパ革命を追求したグラムシ（かつてのイタリア共産党第二代書記長）へ至る第三インターナショナルの初期精神の追究を導きとしたもので、マルクス派共産主義を復興させる最後の旗となるものと思念されました。

## 3

協働委員会では主客の状況から、理論活動、文筆活動をベースとした発信・唱導に力を入れることとなり、『曙光』を継続するとともに、理論誌的な政治同人誌として『21世紀への置文—新年誌（'01-'10）』を発刊しました。そして、『同誌と『曙光』の蓄積を併せるかたちで、二〇一〇年一二月、統一戦線的な政治同人誌『置文21』の改題スタートを行いました（於東京・神田神保町の源来酒家）。また、理論活動、文筆活動さらには出版活動の重点として、マルキシズム&ラディカリズム研究会、東京グラムシ会などへの貢献が挙げられますが、さらに独自のなものとして、以下の三項目がありました。①『曙光』及び『新左翼』のバックナンバー合冊本（全六冊）の作成、②中村丈夫氏（二〇〇七年死去）に関わる文献の整理・編集・出版（文献目録とその付録①、後進の追想文集②、グラムシ論集③、軍事論集④、USB版遺稿集⑤、精選論集⑥—順不同）、③大学闘争の回想・顕彰⑦⑧⑨。

このような活動を二〇一〇年代末まで続ける中で、本お知らせ冒頭で記したような組織的困難化がすすみ、一九九九年、協働委員会第二一回総会において規約の簡素化と組織別称の変更（フェニックス事務局）を行ないました。以降、二〇年代への持久をめざしましたが、同志の損耗が続き、事務所も撤収、今年五月の解散の判断に至ったわけです。

一九九九年の会員再登録—協働委員会の発足よりも、すでに二三年が経過しました。その間、少なからぬ同志が逝去されました。しかし、一九六七年をもって始められた私共の事業は、実を結ば

しかし、八〇年代に入っていくと、大情況はしだいに悪転し始めました。「連帯」の大運動は、ソ連末期の激震と東ヨーロッパの流動の中に押し流されていきました。沖繩闘争、左翼少数派労働運動の残された可能性を追うことこそ必要で、共産主義的党派からさらに大きな革命党を建設する夢を描くことは、当面無理であるという判断が共有されました。「評議会共産主義」の戦術の時代を切り拓くことは困難で、評議会主義、評議会的変革の迂路を探るべき、という選択でした。その結果、九二年に組織再編がなされ、評議会的変革をめざす政治委員会へと、名称・規約が変更されました。ただ、その後八年の苦闘もなかなか奏効せず、沖繩社会大衆党への働きかけも絶たれ、「闘う現場労働者運動センター」も解散する、さらに地域政党方針も困難が多いと、四面楚歌の状況となり、そこに東欧—ソ連の大崩壊の否定的影響が浸透しました。政治委員会としての展望も見えないと、解散論が提起され、困難な議論となりました。

結果として、評議会的変革のための政治グループの存続を求めた部分が残り、九九年、会員再登録を行ない、評議会的変革のための協働委員会（フェニックス・グループ）の発足総会を行ないました。（第二代）委員長には大石和雄が就任しました。なお、社労同の創設者、中村丈夫氏はこの時なお存命で、協働委員会に再登録されました。

ず、今、本お知らせをもって終止符を打たざるをえず、誠に紅涙を流しつつ筆を擱くところでございます。最後に、これまで財政面も含めて様々にご支援いただいたみなさまに重ねて御礼申し上げます。みなさまのご健勝とご健闘をお祈りいたします。

追伸 なお、政治同人誌『置文21』事業につきましては、編集同人のみなさまのご協力と、私共の残余の微力をもつて、しばらく、資金力・執筆力・編集力・印刷力・配布力の続くかぎり継続していきたいと考えております。

また、協働委員会（フェニックス事務局）の解散に当たっては残務が生じないようにいたしますが、それに備えて、残務連絡先を左記のように設定いたします。

携帯080-3434-5301 大石

二〇二二年 五月末日

評議会的変革のための協働委員会  
（フェニックス事務局）

(文献・注)

『新左翼』バックナンバー 合本(1冊)

No. 5 (一九六七年五月) ~ No. 45 (一九七〇年四月)

『曙光』バックナンバー 合本(全5冊)

第1分冊 No. 46 (一九七〇年八月) ~ No. 144 (一九八二年一月)

第2分冊 No. 145・146合併号(一九八二年四月) ~ No. 265 (一九九

二年三月)

第3分冊 No. 266 (一九九二年五月) ~ No. 344・345合併号(一九九

九年二月)

第4分冊 No. 346 (一九九九年五月) ~ No. 402 (二〇〇八年九月)

第5分冊 No. 403 (二〇〇八年一月) ~ No. 412 (二〇一〇年五月)

中村丈夫氏に関わる文献

(1) 『中村丈夫文書庫97・99年整理分文書目録―時系列・帳簿式―』

中村丈夫氏等文書目録作成委員会、B5判、54P、

一九九九年二月一日、一〇〇〇円

〈同付録〉『追憶の人々―伊藤律・保坂浩明・伊藤隆文・

山口裕―』、中村丈夫記、A5判、30P

(2) 『紙碑 中村丈夫―共産党から新左翼への70年―』

中村丈夫追悼集刊行会、四六判、250P、

二〇〇八年七月三十一日、二四〇〇円、彩流社

(3) 『〈研究資料〉中村丈夫氏グラムシ論集―歴史主義と政治の主体―』

中村丈夫氏グラムシ論集編纂委員会、A5判、209P、

二〇〇二年六月一日、一五〇〇円、フェニックス社

(4) 『クラウゼヴィッツの洞察―中村丈夫氏軍事論集―』

中村丈夫氏軍事論集刊行委員会、A5判、322P、

二〇〇六年四月一日、二八〇〇円、彩流社

(5) 『中村丈夫遺稿集』

中村丈夫遺稿集作成委員会、USBメモリ、874P、

二〇一四年二月七日、二〇〇〇円、フェニックス社

(6) 『評議会革命への途―新左翼の理論家・中村丈夫精選論集―』

中村丈夫精選論集編纂委員会、A5判、451P、

二〇一〇年九月一日、三六〇〇円、社会評論社

大学闘争の回想・顕彰

(7) 『回想の全共闘運動―今語る学生反乱の時代―』

『置文21』編集同人・代表者大石和雄、A5判、318P、

二〇一一年一〇月三十一日、二五〇〇円、彩流社

(8) 『言っておきたいことがある―大学闘争45周年記念フォーラム報告集―』

ム報告集―』

責任編集・前田浩志、B5判、66P、

二〇一四年七月二十五日、七〇〇円、

大学闘争45周年記念フォーラム報告集作成小委員会

(9) 『時をこえて語る―大学闘争50周年回想集―』(『置文21』

特別号 No.43)

『置文21』編集同人、B5判、64P、

二〇一八年一〇月三〇日、五〇〇円、フェニックス社

|            |                                 |                                |      |
|------------|---------------------------------|--------------------------------|------|
| <b>第3号</b> | 第三号(17年号)発行に当たって                | 中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄         | P. 2 |
|            | 特集・会員座談会                        |                                |      |
|            | 戦後七〇年と中村丈夫(その二)一九六七年～一九七〇年      |                                |      |
|            | ・司会/進行および責任編集者よりのまとめ            | 大石和雄                           | 3    |
|            | 〈私の補足〉                          |                                |      |
|            | ・新左翼労働運動のエピソード—中電マッセンストと社労同     | 三森義道                           | 20   |
|            | ・社労同結成の時期のグラムシについて              | 入江勝通                           | 21   |
|            | ・一言、闘いの形の閃きとは                   | 前田浩志                           | 22   |
|            | 若き中村丈夫の革命精神と労農派(第2回)            | 三森義道                           | 23   |
|            | レーニン—グラムシ問題と中村丈夫                | 前田浩志                           | 25   |
|            | アジア太平洋戦争と旧日本軍隊論(三)              | 茂呂秀宏                           | 30   |
|            | —賭命義務—死刑によって成り立つ集団は・・・反人間的である—  |                                |      |
|            | 【特別寄稿】自分史のなかの「三池闘争」その二          | 黒沢惟昭                           | 36   |
|            | 編集後記                            |                                | 40   |
| <b>第4号</b> | 第四号発行に当たって                      | 中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄         | 1    |
|            | 特集・会員座談会 戦後七〇年と中村丈夫(その三)一九七〇年以降 |                                |      |
|            | ・大石よりの問題提起                      |                                | 2    |
|            | 一、70年以降の情勢と中村氏の活動               |                                |      |
|            | 二、討論のための問題提起                    |                                |      |
|            | ・当日の座談での発言概要                    |                                | 8    |
|            | ・大石よりの纏め                        |                                | 11   |
|            | 五〇年の回想—脱「脱政治」からの歩み              | 茂呂秀宏                           | 13   |
|            | 編集後記                            |                                | 20   |
| <b>第5号</b> | まえがき—終刊の言葉                      | 中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄         | 2    |
|            | 【特別寄稿】『中村丈夫精選論集』読後感若干           |                                |      |
|            | 季報『唯物論研究』編集長 田畑 稔               | 田畑 稔                           | 3    |
|            | 中村氏の前期社会主義論からウクライナ問題を読み解く       |                                |      |
|            | —『中村丈夫精選論集』解題への補遺に代えて—          | 大石和雄                           | 7    |
|            | 薄明の頃 —1960年代中盤学生運動回想—           | 前田浩志                           | 17   |
|            | 【資料】                            |                                |      |
|            | 「解散お知らせ」                        | 評議会的変革のための協働委員会<br>(フェニックス事務局) | 23   |
|            | 歴史と主体』バックナンバー・総目次               |                                | 28   |

## 『歴史と主体』バックナンバー・目次

|            |   |                        |    |
|------------|---|------------------------|----|
| <b>第1号</b> | 第I部 発足と創刊   |                        | P. |
|            | 創刊に当たって   | 中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄 | 2  |
|            | 創刊への言葉  | 中村長哉                   | 3  |
|            | 第II部 研究論文   |                        |    |
|            | 中村氏の日本国家論を読み直す  |                        |    |
|            | —現在の日本国家の歴史主義的把握のために—                                 | 大石和雄                   | 4  |
|            | 解題・『「中ソ論争」とイタリア共産党』                                   | 三森義道                   | 8  |
|            | アジア太平洋戦争の敗北の総括と旧日本軍隊論・試論(一)                           | 茂呂秀宏                   | 12 |
|            | 中村さん最晩年の諸事情と課題意識                                      | 前田浩志                   | 17 |
|            | 【特別寄稿】対抗ヘゲモニー文化の形成と成人教育                               | 黒沢惟昭                   | 23 |
|            | —ピーター・メイヨー著 里美実訳『グラムシとフレイレ』<br>(太郎次郎社エディタス 2014年)を読む— |                        |    |
|            | 第III部 研究会よりのお知らせ                                      |                        |    |
|            | 会則と参加よびかけ   | 荘司良樹                   | 30 |
|            | 第IV部 遺稿復刻の部   |                        |    |
|            | 『人間と権力』—科学と芸術への提言—<br>(一九六九年七月六日 於工学院大)               | 中村丈夫                   | 32 |
|            | 編集後記  |                        | 37 |
|            | 【広告】『紙碑 中村丈夫』(二〇〇八年、彩流社刊)                             |                        | 38 |
| <b>第2号</b> | 第二号(16年号)発行に当たって                                      | 中村丈夫記念・歴史と主体研究会代表 大石和雄 | 2  |
|            | 特集・会員座談会 戦後七〇年と中村丈夫(その一)                              |                        |    |
|            | 一九四五年～一九六七年   |                        |    |
|            | ・まえがき   | 中村丈夫氏の略歴               | 3  |
|            | ・出席者の発言(要録)   |                        | 4  |
|            | ・戦後変革運動への私的問題意識—座談会への若干の補足                            | 大石和雄                   | 18 |
|            | 若き中村丈夫の革命精神と労農派(第1回)                                  | 三森義道                   | 25 |
|            | アジア太平洋戦争の敗北の総括と旧日本軍隊論(二)                              | 茂呂秀宏                   | 29 |
|            | 中村丈夫研究の基軸について   | 前田浩志                   | 34 |
|            | —編訳・解説書『第三インタナショナルとヨーロッパ革命』の重要性—                      |                        |    |
|            | 【特別寄稿】自分史のなかの「三池闘争」その一                                | 黒沢惟昭                   | 39 |
|            | 編集後記  |                        | 44 |





なかむら たけお 1919年、東京生まれ。1942年、東京帝国大学経済学部を繰り上げ卒業。戦後、日本共産党、社会主義革新運動（政党内）を経て、1967年に社会主義労働者同盟を創設。新左翼八派統一戦線を牽引すべく尽力。1970年より後継組織の理論指導に専念。一時、本州大学（現・長野大学）教授（争議を経て退職）。2007年死去。

著書：「コンドラチエフ 景気変動論」（並紀書房）、「歴史主義と政治の主体—グラムシ論集—」（自費出版）、「クラウゼヴィッツの洞察—軍事論集—」（彩流社）。死去後の2008年に、後進により『紙碑中村丈夫』（彩流社）が編まれた。

# 評議会革命への途

## 新左翼の理論家・中村丈夫精選論集

中村丈夫精選論集編纂委員会／編

A5判ソフトカバー／454頁 本体3600円＋税 ISBN978-4-7845-1872-2

書店注文は社会評論社です。

〒181-0005 東京都三鷹市中原 1-6-29 庄司 気付

TEL 080-3434-5301（大石）

### 歴史と主体——中村丈夫研究

#### 第5号（終刊号）

発行日 2022年12月20日

発行人 大石 和雄

編集・発行 中村丈夫記念・歴史と主体研究会

〈残務連絡先〉

〒181-0005 三鷹市中原 1-6-29

庄司 気付

TEL 080-3434-5301 大石

定 価 400円

定価 400円